かずさの博物誌

ハチクマ

～ハチを食べる奥里山の王者～

文・写真／成田篤彦

2011.9.20

梅雨の晴れ間に房総丘陵地の奥深い里山を訪れた。

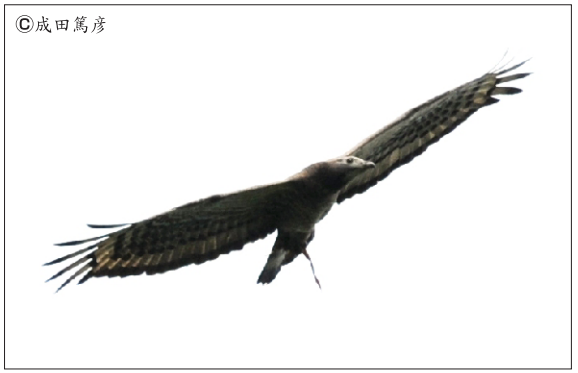
小川が丘陵の崖を深く削り、曲がりくねって流れていた。それに沿って、狭い谷間に田が延々と作られていた。だが、上流の耕作地は放棄され、雑草が丈高く生い茂っていた。

手入れが行き届かない里山の、カシやコナラなどの雑木の若い枝葉が林道を覆っていて、草いきれがむんむんしていた。

しかし、その日は、ノウサギ、ホトトギス、カケス、ホオジロ、トウキョウダルマガエル、モリアオガエルの卵塊、ミドリヒョウモン（蝶）などを撮影することができ、満ち足りた気持ちになって、車に戻ってきた。

そのとき、右手の山陰から、一羽のカラス大のタカが眼の前を悠然と舞い上がった。

「サシバ（谷津田にすむタカ）と



▲ハチクマ　タカ目 タカ科
全長　雄が約57㎝、雌が約60.5cm。夏鳥、県重要保護生物、国の準絶滅危惧種＝2011年6月3日　上総地方　筆者撮影

どこか違う？」と感じながら、急いで、カメラをとり、シャッターを切った。彼？は狭い林道の上空を旋回しながら、ゆったりと上へ上へと舞い上がっていく。

撮り終わった後、カメラの液晶画面を見ると、全部、シルエットであった。それを見て「やはり、サシバか？」と思い直した。

しかし、自宅のパソコンで見ると頭が細長く、真丸な眼が飛び出ていて、タカ類の鋭さが感じられなかった。つばさは長く幅広い。画面を明るくしてみると、見事な白と黒の縞模様が現れた。特に尾羽の縞が太くはっきりしていた。図鑑で見るとサシバではなく「ハチクマ」だと思った。しかし、「奥の深い里山とはいえ、人里の近くにハチクマがいるのか？」と疑い、念のために、友人に写真を送ってみた。すると「ハチクマに間違いありません。あのあたりで私も撮りました。しかし、何か足につかんでいますね」と返事をくれた。

再度、写真を拡大し、注意深く見るとつかんでいるのはアカガエルで、ひものように見えるのはその脚に違いないと思った。

さて、ハチクマは東アジアに分布し、日本でも夏に低山林で繁殖し、秋に東南アジアに渡り、越冬する。渡りの時にサシバと共に通過することもあるそうだ。

▲山陰から舞い上がるハチクマ＝2011年6月3日　上総地方　筆者撮影

近年、人工衛星追跡調査で東南アジアを回る詳細なルートが明らかになり、ハチクマが1万キロを超える渡りをすることが判明している。

彼らは地中に巣を作るジバチの幼虫やさなぎを好み、足やくちばしで巣を掘り起こして食べる、変わった習性を持つタカである。密生した羽毛と脚を覆ううろこがハチの攻撃から身を守ると同時に、ハチの毒に対する免疫を持っているともいわれる。

ハチクマはクロスズメバチの巣を繁殖期にヒナへ次々と運び込むという。

クロスズメバチの巣は目立たない場所に作られており、入口も狭いのでこの巣をどうやって探すのかなど、ハチを食べる生態にナゾが多い。

また、昆虫、ネズミ、カエルなども食べ、食物連鎖の頂点に立つ奥里山の王者でもある。

本県では丘陵地で繁殖するが、数は少ないという。

ところで、野鳥観察の素人の私がハチクマを撮影できるとは思っていなかったし、最初の印象の「サシバではない？」との勘が的中したのがなにより嬉しかった。

いずれにせよ、上総にハチクマが毎年訪れ、繁殖できるように、多くの生きものが育つ、里山と谷津田の適切な管理がなされることを期待したいものだ。

▲つばさをひろげたハチクマ
羽の色は個々に違う＝2011年6月3日　上総地方　筆者撮影

〈主な参考文献〉　2011年度版千葉県レッドデータブック、千葉県の自然誌本編6・2001、山渓カラー名鑑日本の野鳥・1996山と渓谷社、信州生き物探訪・武田博仁著2007郷土出版社

◎写真・文章の無断転載を禁じます。